

六条御息所の再登場

——母と女の位相に注目して——

権 桃 楹

序

源氏物語の第二部世界を読んでいると不可思議な内容に遭遇する。濔標巻で亡くなることで物語世界から退場したはずの六条御息所が死霊となって再び登場してくるのである。怨念を持った存在が平安時代にしばしば取り沙汰されたことから、紫の上の発病や柏木による女三の宮との密通を繰り返す際に六条御息所の死霊は都合の良い存在だったと考えられる。だが、単に舞台回しのために設けられた装置であるならば、その死霊を必ずしも六条御息所に限定する必要はないはずである。にもかかわらず、若菜下巻の物語は死霊の存在を六条御息所に特定した。

若菜下巻における死霊について、六条御息所の再登場と

いう点からその意義を考察した先行研究としては大朝雄二氏の論考^①をあげることができる。氏は、六条御息所を再登場させることで紫の上の発病や柏木による密通事件が光源氏の絶対性の衰退として位置づけられたと論じるものの、その契機が恋人の死霊という個人的なものであるためにその衰退は源氏の内面にのみ関わるものと論じた。登場人物たちの内面が繋がりをもち得ない第二部世界で再び登場してきた六条御息所の意義を、あくまで源氏個人の内面に限定して捉える氏の論には首肯されるところもあるが、物語を個の内面の問題に還元し、源氏の衰退などに結びつけることにはいささかの疑問が残る。

若菜下巻の六条御息所を考えるに際しては、物語が彼女に付与した二つの性質に注目したい。六条御息所は人間苦

にまで連なる苦悩を抱えた女であると同時に、源氏の栄華獲得に大きな働きをする秋好中宮の母でもある。物語はそのような二つの性質を操りながら展開しているように思う。六条御息所の二つの性質に注目した論としては沢田正子氏や奥村英司氏の論考^③がある。沢田氏は、源氏物語における母性の意味と主題との関わりを究明する論考において、女の業が極めて強烈に問われている六条御息所にも母性があることを論じた。氏の論考では、六条御息所が源氏の栄華を支えることと、源氏によっては彼女の魂が救われないことを論じたところに大いに首肯される。一方、奥村氏は、沢田氏と同じく、娘の斎宮女御にその人生を受け継がせることを指摘したのちに、その時点をも母の死んだ秋を好むという属性を付与された薄雲巻に特定する。甚だ示唆に富む論考であり、本稿ではこれらの論を踏まえて、六条御息所に付与された、母として女としてという二つの性質が物語展開にいかに関わっているかを考察する。

一、六条御息所の伊勢下向

葵巻には夕霧を出産した葵の上が六条御息所の生霊に取り憑かれて亡くなり、妻を亡くした源氏が紫の上と新枕を交わすなどが語られる。そのような展開において六条

御息所は、葵の上とともに物語世界から消え去ることで紫の上を源氏の妻に位置づける役を担っていると言えよう。だが、六条御息所という人物の場合は、高田祐彦氏の指摘したように、物語展開と女の苦悩とを結びつけるところにより大きな意義を見出すべきであろう^④。夕顔巻で「六条わたり」の女として登場していた六条御息所が葵巻で据え直される所以は、まさにそこにあるように思われる。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、斎宮にゐたまひしかば、大将（＝源氏）の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにこと、つけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。

（②葵18）^⑤

葵巻には「六条わたり」に住んでいた高貴な女性が実は前坊との間に娘を設けた御息所であることや、その娘が斎宮に卜定されることが突然語られる。そして六条御息所が娘とともに伊勢へ下ることを希望していることも新たに示される。「六条わたり」の女が六条御息所に据え直されたとなん、伊勢下向を希望する人物となったのである。この据え直しには、『河海抄』以来に指摘されてきた通り、史実の人物、斎宮女御徽子が投影されている。

重明親王の娘であり、村上天皇の女御だった斎宮女御徽

子は天皇の没後に齋宮に卜定された娘の親子に付いて伊勢に下向する。それは『日本紀略』の貞元二年（九七七年）九月十七日の記事に「伊勢齋王母女御相從下向。是无先例。早可令留者。」と記されるところに確認できる。承平七年（九三七年）に朱雀朝の齋宮として伊勢へ下向した経験を持つゆえに齋宮女御と呼ばれた彼女にとつては二度目の下向だった。その際の彼女の感慨は「世にふればまたも越えけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらん」（『齋宮女御集』²⁶³）と、娘とともに下向する途上で詠んだ歌に垣間見られる。『拾遺集』にも見えるこの和歌には四十年を隔てた再びの下向に対する感慨がうかがわれ、十四年ぶりに禁中に入る六条御息所の感慨を詠んだ「そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞかなしき」（②賢木93）の和歌はこの齋宮女御の歌を想起させる。が、徽子には、「鈴鹿山音に聞きける君よりも心の闇に惑ひにしかな」（『齋宮女御集』¹³²）とある歌に見る如く、娘を思う母親の気持ちもあったと思われる。徽子の歌が「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』雑一¹¹⁰²）とある、藤原兼輔の歌の表現を引いたことは言うまでもない。

そのような徽子が六条御息所に重ねられるのは、賢木巻に「親添ひて下りたまふ例もことになけれど、いと見放ち

がたき（娘ノ）御ありさまなるにことつけて、うき世を行き離れむと思す」（②賢木83）と、娘に同行した伊勢下向の前例がないとする『日本紀略』の徽子の記述と同じくするためであろう。

娘を思う徽子女王の「心の闇」も、一見すると、右の引用に「幼き御ありさまのうしろめたさ」とある部分や賢木巻の「いと見放ちがたき（娘ノ）御ありさま」とある箇所に見る六条御息所の親心に対応するかに見える。ところが、傍点を施した「ことつけて」とある言葉からも確認できるように、六条御息所の親心は冷淡な源氏から逃れる口実に過ぎない。¹⁰まずは徽子女王の准拠は、六条御息所が源氏から逃れられるようにするためであった、と言えよう。

ところで、六条御息所は源氏の冷遇から離れ去ることを希望するものの、それを潔く決心することができない。六条御息所は「人笑へ」への憂慮と男への愛執のために、源氏から離れ去ることができないのである。そのような六条御息所の心境を物語は「源氏ヲ」つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。」と伝える（②葵30～31）。世間に噂されていた源氏の冷淡な待遇から逃れるために伊勢下向を考慮するものの、六条御息所に

はその下向によつて源氏に見捨てられたといよいよ噂されるのではないかと心配だった。六条御息所には源氏から離れるにしても、彼の側に留まるにしても、世間の視線が苦しく感じられていたのである。無論、彼女の苦しみは世間体を意識することだけに止まらない。

うちとけぬ朝ぼらけに（源氏ガ）出でたまふ御さまの
をかしきにも、なほ（六条御息所ハ）ふり離れなむこ
とは思し返さる。やむごとなき方（＝葵ノ上）に、い
とど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、ひ
とつ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちき
こえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと、なかなかも
の思ひのおどろかさるる心地したまふに、（源氏カラノ）
御文ばかりぞ暮つ方ある。（②葵34）

葵の上側との車争い事件で屈辱を覚えた六条御息所は物
思いに乱れ、そのような彼女を源氏が見舞いに訪れる。右
には見舞いに来てくれた源氏の帰りを見送る六条御息所の
心境が綴られている。源氏の美しさに改めて魅せられた六
条御息所は、源氏から離れて伊勢へ下ることを躊躇せずに
はいられなかった。が、彼女はすぐさまに、葵の上に子供
が生まれると源氏を待ち続けるしかない自分の境遇に思い
至る。そのような彼女の苦悩が「袖ぬるるこひちとかつは

知りながら下り立つ田子のみづからぞうき」（②葵35）とい
う一首の和歌に凝縮されている。男に顧みられないことに
苦しみながらも愛し続けるしかない絶望感を表現すべく、
物語は源氏との別離を決めかねる六条御息所の苦衷を描い
たと言えよう。

ところが、源氏と実際に別れるようになる展開において
は、六条御息所の伊勢下向は自主的選択というより、やむ
を得ない選択となっている。それは、

：大殿の君（＝葵ノ上）も亡せたまひて後、さりと
も、世人も聞こえあつかひ、宮の内にも心ときめき
しを、その後しも（源氏ガ）かき絶え、あさましき御
もてなしを（六条御息所ハ）見たまふに、（源氏ニハ）ま
ことにうしと思すことこそありけめと（六条御息所ハ）
知りてたまひぬれば、よろづのあはれを思し棄てて、
ひたみに出で立ちたまふ。（②賢木83）

と語られる、賢木巻の巻頭から窺えよう。物語は源氏の訪
れがなかったために、六条御息所が「よろづのあはれを思
し棄てて」伊勢下向を決心したと伝える。だが、右の傍線
部からも分かるように、それを決心する以前の六条御息所
には葵の上に代わる存在になり得るという期待があった。
六条御息所は生霊になったことを「わが身ながらだに疎ま

しう」思いながらも(②葵42)、源氏の妻になることに期待をかけていたのである。そのような期待があつたにもかかわらず、彼女はついに伊勢下向を選択せざるを得ない。「まことにうしと思すことこそありけめ」と、源氏が生霊になつた自分に対する嫌悪感を抱いていると知つたためである。源氏の嫌悪感を察知した六条御息所には、男のそばに留まる選択肢が残されていなかったわけで、そのような別離は須磨に流謫した源氏が「あはれに思ひきこえし人(『六条御息所』を、一ふしうしと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひうむじて別れたまひにし」(②須磨194)と想起するところによつて追認されよう。源氏との別離において、娘が斎宮に卜定されたという設定は、御息所の離京という物語のなめらかな展開を保証するとともに、なおも源氏への愛執を断ち難く別離を悲しむ六条御息所の造型にも有効だったのである。

六条御息所の伊勢下向の決意が語られたのちに、物語には源氏による秋の野宮訪問が設けられる。源氏は、桐壺院の病気もあり慌ただしい時期であつたが、「(六条御息所が自分ヲ)つらきものに思ひはてたまひなむいとはしく、人聞き情なくやと思しおこして」(②賢木84)野宮を訪れる。野宮の対面における源氏の心境は「あはれと思し乱るるこ

と限りなし」(②賢木88)と叙されたところに端的に表わされているが、そのような感情の高潮をもたらした対面が、実は相手や世間から薄情者に思われまいという源氏の意識的努力に導かれたものだった。一方、六条御息所の心境の変化は「やうやう今はと思ひ離れたまへるに、さればよと、なかなか心動きて思し乱る。」(②賢木88)と語られる。源氏と対面した六条御息所は別離の決意が再び揺らいだのである。とは言うものの、六条御息所の伊勢下向は「うち返し定めかねたまふべきことならねば」(②賢木90)とあるように、避けられないものとなつていた。六条御息所は目前にある源氏との別離に茫然とするしかない。そのような六条御息所の心境は、

(源氏ガ)旅の御装束よりはじめ人々のまで、何くれの御調度など、いかめしうめづらしきさまにて、とぶらひきこえたまへど、(六条御息所ハ)何とも思されず、あはあはしう心うき名をのみ流して、あさましき身もありさまを、今はじめたらむやうに、(伊勢下向ガ)ほど近くなるままだに、起き臥し嘆きたまふ。斎宮は、若き御心に、不定なりつる御出立のかく定まりゆくを、うれしとのみ思したり。(②賢木90~91)

と、源氏から饒別の品々を贈られた時の反応に確認できる。

野宮から帰宅した源氏は後朝の文とともに伊勢下向の際に必要な衣類や調度を贈った。物語は源氏から贈られた品々を前に「何とも思されず」にいる女の様子を通して別離に対する女の衝撃を語る。己の世間体を意識した源氏の訪問が六条御息所の心に波紋を起こし、再び彼女を苦悩の世界に突き戻しているかのようである。右の引用ではそのような六条御息所の様子が、「若き御心に、不定なりつる御出立のかく定まりゆくを」喜ぶ娘によって照射されることを押さえておきたい。そして、そのような斎宮の様子が伊勢下向の途上で詠んだ徽子の「世にふればまたも越えけり：」という和歌に対する返歌に見る、規子の様子に似通うことも押さえておく。「鈴鹿山しづのをだまきもろともにもふるにはまさることなかりけり」（『斎宮女御集』264）という歌を詠んで母との同行を喜ぶ規子の様子は、右の引用における斎宮の様に類似する。が、徽子とその娘が伊勢下向の途上で歌を交わしたという事実は、源氏が伊勢に下って行く六条御息所と和歌を交わす設定（②賢木 94～95）に投影されているのではないだろうか。物語は斎宮女御徽子を准拠にしながらも、それをずらして源氏と六条御息所の関係を描いたのではなからうか。

二、娘に内在化される女人苦

前節では斎宮女御徽子を准拠とする六条御息所の伊勢下向が、実は源氏に対する彼女の愛執を引き立てることを確認した。引き続きは、濔標巻と薄雲巻を中心に六条御息所の母親としての側面が導く物語の変化に注目したい。

濔標巻には朱雀帝の讓位と冷泉帝の即位、源氏の内大臣就任、明石の姫君誕生などの事件が物語られる。これらの事件から察せられるように、濔標巻からの物語は源氏にあってられた予言の実体化や、その準備として政界に復権した源氏の様子を語って行く。そのような展開の中で物語は六条御息所母娘が上京していることを「まことや、かの斎宮もかはりたまひにしかば、…」（②濔標 309）と語る。娘の前斎宮が源氏の養女として冷泉朝の中宮になる以降の展開に鑑みると、濔標巻では御息所の帰京よりも前斎宮の帰京を取り上げることに眼目が置かれたと言えよう。帰京後まもなくして病で命を落とす六条御息所は、以降の展開を導くべく、娘を源氏に託すために再び登場したということである。

ここで前斎宮を源氏の養女に据えることの意義に関して少し触れておきたい。権力を基盤にして栄華を獲得して行

源氏にとって、養女となった前斎宮が重要な意味を持つのは、彼女が不義の子冷泉に対する支援の形式に変化をもたらすためである。言い換えれば、物語は源氏権力の根柢を、桐壺院の遺言に発する弟への後見から、養女を帝に内させた婚姻関係に基づく後見に変えたということである。このように摂関制下の実態に近づけることによって、源氏権力のリアリティーが高まったことは田中降昭氏の指摘^⑪通りである。ちなみに、絵合巻における弘徽殿女御側との対立もそのような後見の形式に支えられてこそ可能だったであろう。ともあれ、史実のリアリティーを虚構世界に取り入れたことの意義は、冷泉誕生に纏わる秘密を保持することからも求められるのではないだろうか。冷泉が源氏権力の出发点であることは疑いないが、その不義の子の誕生に纏わる秘密は、源氏の権力を脅かし得る致命的な弱点でもある。源氏権力を語る物語としては、その弱点を補う論理が必要であり、それを養女の前斎宮と冷泉の婚姻という、摂関制の論理が担っていると言えよう。考察の主題とさほど関わらないために、この問題にはさらに深入りはないが、前斎宮を源氏の養女に位置づけるために、物語が娘の行く末を心配する六条御息所の母親としての心情を取り入れたことを見逃してはなるまい。

（六条御息所ノ死後娘ガ）心細くてとまりたまはむを、かならず事にふれて（源氏ハ）数まへきこえたまへ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。かひなき身ながらも、（六条御息所ガ）いましばし世の中を思ひのどむるほどは、とぎまかうさまにものを思し知るまで見たてまつらむとこそ思ひたまへつれ

（②薄標310～311）

右の引用は、病気になって出家した六条御息所が見舞いに来てくれた源氏に残す遺言である。衰弱した体を脇息にもたげていた六条御息所の耳には、几帳の向こうから源氏の泣き声が聞こえた。その時の御息所の様子を物語は「（源氏ガ）かくまでも思しとどめたりけるを、女（＝六条御息所）もよろづにあはれに思して、斎宮の御事をぞ聞こえたまふ。」（②薄雲310）と語る。「女」という表現によって源氏と六条御息所の男女関係が強調されることには注意して良からう。その表現から、なおも源氏に心惹かれる六条御息所の様子が垣間見られるためである。ともあれ、源氏に感動した六条御息所は涙ながら右の引用の言葉を発して娘を託した。その末尾に見る思惟は、冷泉に入内させる思惑から前斎宮を「ものの心知る人」（②薄標320）だと語る源氏のそれと対照的である。「ものを思し知」らないためにもつと

娘の世話をしてあげたかったと語る六条御息所の言葉からは、娘の行く末を心配する母親の心情が読み取れるのである。

娘の行く末を心配する母親の心情は、娘を源氏に託した六条御息所が、

(A)うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思しよるな。うき身をつみはべるにも、女は思ひの外にてももの思ひを添ふるものになむはべりければ、(娘二ハ)いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思つたまふる

(② 濔標311-312)

という言葉をつけ足すところからも確認できる。娘とは男女の付き合いをしないほしいと源氏を戒める六条御息所の遺言からは、娘の前斎宮には愛執による苦悩を経験させまいと思う、母親の心境が読み取れよう。そして前節に確認した、源氏への愛執に苦しんだ六条御息所の人生も想起される。御息所が己の経験に照らして源氏を戒めたと言えようが、その戒めが賢木巻から見る前斎宮に対する源氏の「すき心」に照応することを看過してはなるまい。

前斎宮に対する源氏の「すき心」は、彼が「…例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて、いとう見たてまつりつべかりしいはけなき(斎宮ノ)御ほどを、

見ずなりぬるこそねたけれ、世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし」(② 賢木 92-93)と、伊勢下向を目前にした彼女を思うところに確認できる。伊勢に下る斎宮側から届いた返信を契機に物語に「すき心」を露わにした源氏は、以降も続いて斎宮への「すき心」を抱いている。濔標巻での源氏が帰京した母御息所には気が乗らないものの、前斎宮に対しては「いかにねびなりたまひぬらむと、ゆかしう思」った(② 濔標 309)のである。六条御息所が付け足した引用(A)の言葉は、そのような源氏の「すき心」を看破して発せられたかのである。一方、それを聞いた源氏の様子は、

(B)「あひなくものたまふかなと(源氏ハ)思せど、(源氏)「年ごろによろづ思うたまへ知りにたるものを、昔のすき心のなごりあり顔にのたまひなすも本意なくなむ。よしおのづから」とて、外は暗うなり、内は大殿油のほかに物より透りて見ゆるを、もしやと思して、やおら御几帳のほころびより見たまへば、…：はつかなれど、(前斎宮ハ)いとうつくしげならむと見ゆ。御髪のかかりたるほど、頭つきけはひあてに気高きものから、ひちちかに愛敬づきたまへるけはひしるく見えたまへば、(源氏ハ)心もとなくゆかしきにも、(六条

御息所ガ)さばかりのたまふものを、と思し返す。

(②濔標312)

と語られる。前斎宮に対する「すき心」を戒められた源氏は、今の自分にはかつての「すき心」がないと言い返す。が、前斎宮の姿が見えやしないかと几帳の隙間を除く彼の行動は、その言葉とは裏腹なものである。物語は源氏の行動を通して、彼には前斎宮に対する「すき心」がなおも健在であることを示した。しかしながら、右の傍線を施したところに見る如く、源氏は御息所の遺言を思い出して前斎宮への「すき心」を自制する。母御息所の遺言が源氏に影響を及ぼし、「すき心」の自制を促したと言えよう。

前斎宮の入内を繰り広げる物語には源氏に「すき心」の自制を促す必要があった。桐壺巻や若紫巻にあった予言を実体化して行く物語の論理に則つたために、源氏が策略家のような面貌を見せることや、その初見が濔標巻で前斎宮の処遇を決める際であることは伊藤博氏の指摘通りである。前斎宮を懇望する朱雀院の要請を黙殺し、彼女を冷泉に入内させようと画策する源氏は確かに冷徹な政治家のそれである。ところが、藤壺の前で「亡き蔭にてもかの(六条御息所ノ)恨み忘るばかり」のこと(②濔標320)として前斎宮の入内を位置づける源氏の様子から察すると、

彼を単に冷徹な政治家と言うのは躊躇われる。無論、前斎宮の処遇を藤壺に相談する以前から源氏が養女の入内を考慮したことや、藤壺との相談の意義が朱雀院の要請を謝絶する名分の確保にあることから考えると、源氏が六条御息所に言及することで藤壺を説得しているように見える。しかしながら、薄雲巻の源氏が「(六条御息所ガ)あさましうのみ思ひつめてやみたまひにしが、長き世の愁はしきふしと思ひたまへられしを、かうまでも(斎宮女御ニ)仕うまつり御覽ぜらるるをなむ、慰めに思うたまへなせど、燃えし煙のむすぼれたまひけむはなほいぶせうこそ思うたまへらるれ」(②薄雲460)と発する言葉に照らすと、藤壺の前で発せられた源氏のこの言葉を、説得のためだけに口にした出任せとは考えられない。源氏は女御となつた前斎宮への後見を一種の償いのように思っていたのである。そのような源氏の思惟は、梅枝巻に「宮(『秋好中宮』)にかく後見仕うまつることを、(六条御息所ハ)心深うおはせしかば、亡き御影にも(源氏ヲ)見なほしたまふらん。」(③梅枝416)とあるところや、次節の引用(1)から繰り返して確認される。源氏が自らの「すき心」に対する真剣な反省を持っていたとは思われないものの、前斎宮の冷泉帝への入内を決定する彼には六条御息所に対する「いぶせ」さがあったと考え

られよう。六条御息所に対する源氏の「いぶせ」さが冷泉帝の実父という彼の弱点を補強する行動を促したと思われるのである。このことから、源氏への愛情に苦しんだ六条御息所の経験が、源氏に残した遺言を通して娘の前斎宮の人生を切り開いたと言え、また権力を収めて行く源氏を支えているとも言えよう。

しかしながら、明石の姫君を二条院に引き取る事件や藤壺の死などが繰り返られる薄雲巻では、亡くなった六条御息所の存在が右に見てきたものとは異なる方法で娘や源氏の人生に関わっている。その変化の切っ掛けは、源氏が御息所の遺言に逆らって斎宮女御に「すき心」を訴えたことである。引用(A)の遺言がもはや直接には源氏に影響を与えられなくなったのである。

理想の女性藤壺に「いま一たび（愛情ヲ）聞こえずなりぬる」(②薄雲445) 悲しみに堪えかねるかのように、源氏は女御となった前斎宮に、「あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」(②薄雲460) と、抑制してきた「すき心」を打ち明けた。六条御息所の遺言に逆らう源氏の様子は、母を偲ばせる秋を好むと言った女御に対して「君もさはあはれをかはせ人しれずわが身にしむる秋の夕風」(②薄雲463) という和歌を言いかけるところに繰り返して確認

できる。無論、斎宮女御はそのような源氏の言動に一向に应ぜず、源氏自らも「すき心」を自制するので、二人が男女関係に発展することはない。そもそも物語には源氏に六条御息所の遺言を破らせる意図はなかったように見える。にもかかわらず、物語は六条御息所の遺言に逆らって斎宮女御に「すき心」を訴える源氏の様子を描いている。まるで権力を志向して行く源氏を描く物語の論理では彼の「すき心」が抑制できないことを示しているかのである。押さえ切れない「すき心」を斎宮女御に訴えたものの、「君もさはあはれをかはせ…」の和歌を言いかけたのちの源氏は、

このついでに、(源氏ハ) え籠めたまはで恨みきこえたまふことどもあるべし。いますこしひがこともしたまひつべけれども、(斎宮女御ガ) いとうたてと思いたるもことわりに、わが御心も若々しうけしからずと(源氏ハ) 思し返して、うち嘆きたまへるさまのもの深うなまめかしきも、(斎宮女御ハ) 心づきなうぞ思しなりぬる。(②薄雲463)

と、再び「すき心」を自制する。「すき心」を訴え続けることが、女御に厭わしく思われ、また自ら考えても年甲斐もなくけしからぬことだと判断したためである。一見した

ところには、「すき心」を自制する動機が源氏の内面にのみあるかに見える。だが、右の引用に見る源氏の自制を、引用(A)とそれに次ぐ引用(B)の叙述に照らし合わせて考えると、なおも引用(A)の遺言が源氏に影響を及ぼしていることが確認できる。実は引用(B)の中略を施した部分には源氏に垣間見られた六条御息所母娘の様子が「(六条御息所ハ)御髪いとをかしげにはなやかに削ぎて、…帳の東面に添ひ臥したまへるぞ宮(＝斎宮女御)ならむかし、…頬杖つきて、いともの悲しと思いたるさまなり。」(②落標³¹²)と語られている。源氏に遺言を残す御息所の様子が「近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかかりて」(②落標³¹⁰)と語られたことに考え合わせると、右の引用における源氏は女御も引用(A)の遺言を聞いたと考えていたのではなからうか。すなわち、右の引用に見る自制には女御が母の遺言に逆らうはずがないという、源氏の諦観に似た思いも働いているということである。源氏は六条御息所の遺言の影響を直接に受けなくなったものの、母の遺言を守る斎宮女御が彼を疎むことでもその遺言は守られているということである。

以上、苦悩に満ちた六条御息所の人生が娘の斎宮女御や源氏の人生にいかなる影響を及ぼしているかを確認した。

六条御息所は遺言を残すことで源氏に「すき心」を抑制させ、娘の人生を切り開く。それが源氏の権力を志向して行く物語の論理を支えることは言うまでもない。だが、薄雲巻での彼女には源氏を促して「すき心」を自制させることができない。彼女は娘の斎宮女御に守られる遺言を通して、源氏の栄華に影を潜めたまま、第二部で再び登場する機会を待つようになったのである。

三、死霊を操る物語の作為性

以上に述べたことを踏まえて、この節では若菜下巻の六条御息所が死霊となつて登場することの意義を考えたい。若菜下巻に再登場する六条御息所は、源氏権力との関わりが見えず、娘との繋がりも薄らいでいるように思われる。そのことは死霊となつて紫の上に取り憑いていた六条御息所が繰り広げる問はず語りから確認できよう。若菜下巻で源氏の前に姿を現した六条御息所は、

中宮(＝秋好中宮)の御事にても、いとうれしくかた
じけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異に
なりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、
なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまる
ものなりける。

(④若菜下 236～237)

と、秋好中宮を後見してくれたことを感謝し、死霊となった理由を明かすことで、長い問はず語りを切り出す。死霊の間はず語りは、後宮における競争や嫉妬への戒め、そして斎宮を勤めた罪を消滅させる法要への促しで結ばれる。紫の上に取り憑いた経緯や成仏供養を頼む内容が、娘に關する話の間に挟まれたかのようなのである。このような配列は死霊となった六条御息所が娘への深い思いを持っているかに思わせる。だが、右の引用における死霊は、娘のことに感謝する念があるにもかかわらず、死んでいるために娘のことまではさほど深く思わなくなったのか、源氏への「心の執」が消え去らないと語っている。娘を思う気持ちがあったく読み取れないとまでは言えないものの、源氏への「心の執」がそれを上回ることとは否めない。秋好中宮に対して後宮における競争や嫉妬を「ゆめ御宮仕のほどに、人ときしろひそねむ心つかひたまふな。」(④若菜下237)と戒めた言葉も、「心の執」に苦しむ女の立場から発せられたものと考えるのが穏当であろう。ここでは、母親より女としての様子が強調される右の引用が、次の引用(I)に照応することに注目したい。

(I) いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、(六条御息所ガ) いみじく思ひしめたまへ

りがいとほしく、げに、人柄を思ひしも、我(＝源氏)罪ある心地してやみにし慰めに、中宮(＝秋好中宮)を、かく、さるべき御契りとはいひながら、とりたてて、世の譏り、人の恨みをも知らず心寄せたてまつるを、(六条御息所ハ) かの世ながらも見なほされぬらん。

(④若菜下209～210)

引用(I)からは、前節にも触れたように、源氏が秋好中宮への後見を六条御息所に対する償いとして位置づけていることが読み取れる。六条御息所があの世界から自分を見直しているはずだと語った源氏の言葉からは、秋好中宮への後見をもって六条御息所への償いを果たしたと思っている様子も見られる。源氏が紫の上の前で「恨むべきふしぞ、げにことわりとおほゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。」(④若菜下209)と、六条御息所に恨まれたことを語り得た背景には、世間の非難を押し切って彼女の娘を中宮になしたという自負もあったようである。しかしながら、物語は愛執のあまりに死霊になった六条御息所を再登場させることで、娘への後見が母親への償いになるという源氏の考えが思い込みに過ぎなかったことを示した。言い換えれば、母親としてのあり方より女としてのあり方を前景化している六条御息所を描く

ことで、物語は癒やされない愛執の苦悩を浮上させたということがある。言うまでもなく、女の抱えた苦悩を取り上げようとする物語の要請による展開であろう。物語が展開に応じて六条御息所の母の側面を強調したり女の側面を強調したりすることが確認できようが、そのような六条御息所の造型から作為性を読み取ることができるとはなからうか。

最後に、若菜下巻で描かれた六条御息所の再登場によって作り出された物語の磁場を確認しておきたい。結論を先に述べると、紫の上や女三の宮を苦悩の世界に引き留めるところに、御息所の再登場が一助すると言えよう。すなわち、紫の上や女三の宮の母親としての生き方が、彼女たちの女としての生き方を代償し得ないことを示すという考えである。

明石一族の運命を語った明石の入道の手紙によって過去を知った明石の女御に源氏は「あなた（＝紫ノ上）の御心ばへをおろかに思しなすな」（④若菜上¹²⁹）と訓戒した。この源氏の訓戒によって紫の上は、明石一族の榮華に圧倒されそうな母親としての位相を漸く保つことができた。女三の宮の降嫁を「などで、よろづのことありとも、また人なば（紫ノ上二）並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くな

りおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし」（④若菜上⁶³～⁶⁴）と、後悔していた源氏が降嫁を承諾したお詫びとして紫の上に女御の母としての立場を保証しているかのようなのである。ともあれ、源氏によって強調された紫の上の母親としての立場は、

内裏の帝（＝今上）さへ、（女三ノ宮二）御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらんもいとほしくて、（源氏ガ宮二）渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく、さるまじきこと、ことわりとは思ひながら、（紫ノ上八）さればよとのみやすからず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたにとりわきてかしづきたてまつりたまふ。その御あつかひになん、（紫ノ上八）つれづれなる御夜離れのほども慰めたまひける。
（④若菜下¹⁷⁷～¹⁷⁸）

と語られる状況に備えたもののように思われる。冷泉の讓位によって即位した今上が女三の宮を庇護することで、源氏の女三の宮を訪れる日数が増えた。その状況を予測していた紫の上は安からぬ気持ちでありながらも、平然とした様子を繕っていた。紫の上は明石の女御が生んだ女一の宮を世話しながら、源氏の夜離れを慰めていたのである。だ

が、六条御息所の死霊が登場して作り出した磁場の影響下では、そのような慰めでは女三の宮の降嫁によって抱えるようになった紫の上の苦悩は解消され得ないのであろう。

薫を残して出家した女三の宮の場合は、

人々（＝女房達）すべり隠れたるほどに、（源氏ハ）宮（＝女三ノ宮）の御もとに寄りたまひて、「この人（＝薫）をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。（④ 柏木 324～325）

とある場面にその母親としての側面が強調されている。薫の五十日の祝儀ののちに、わが子を見捨ててまで出家しなければならなかったのかと、源氏は詰るかのような言葉を女三の宮に発した。母親の立場を覺らせて女三の宮を「おどろかし」たその言葉は、彼女の出家が六条御息所の死霊に操られたことを知っている人物によって発せられただけに、出家に際する女三の宮の立場を照射している。薫の出産によって「身の心憂きこと」（④ 柏木 300）を心の底から感じるようになった女三の宮には、生まれた薫に対する源氏の疎ましい態度を恨む古女房の言葉を聞いて「さのみこそは（源氏ガ）思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心」が生じた（④ 柏木 301）。

薫の誕生や古女房の言葉を受け止める女三の宮の様子は、母親よりも一人の女としての生き方を強調した六条御息所のそれと重なり合っていると言えよう。また、女三の宮は柏木との密通によって抱えるようになった女人苦ゆえに母としての生き方まで放棄して出家したとも考えられよう。だが、物語は「誰が世にか種はまきしと人間はばいかが岩根の松はこたへむ」（④ 柏木 325）と詠んだ源氏の和歌を通して、薫の生みの母である限り、出家によっては女三の宮の不遇感が消え去らないことを露わにしている。

結

以上に六条御息所に付与された二つの性質を確認し、それが物語展開に関わるかを確認した。物語は御息所を源氏への愛執に苦しむ人物に設定した上に、展開に応じては彼女に母としての側面を付随させる。特にその傾向は滯標巻に発せられた彼女の遺言に著しく現れて、権力を志向して行く源氏の支えとなっていた。だが、薄雲巻での源氏は御息所の遺言の影響を脱したと言わんばかりに、斎宮女御に「すき心」を訴える。その時点から母の遺志は娘の斎宮女御によって守られるようになり、御息所は物語の前景から姿を消す。

若菜下巻での六条御息所は、斎宮女御への後見が母親への償いになっていくはずだという源氏の思惟を、その登場をもって否定した。そのことによってそれまで語られてきた権力や栄華の物語が源氏一人に帰属され、彼女の抱えていた女の苦悩は癒やされ得ないものとなった。女の救済問題に移行しようとした物語が、その準備として紫の上と女三の宮を苦悩する一人の女に造型すべく、六条御息所を再登場させたとも言えよう。

六条御息所は常に源氏への愛執に苦しむ女として登場しているであり、その母性の発露も愛執に捕らわれた人生経験を娘に味わわせまいと思うところに見出される。物語はそのような六条御息所を造型する際に、斎宮女御徽子の伊勢下向を准拠としながらも、それを巧みにずらして、母と女の挟間で揺れ動く女の物語として新たに再生させたのである。

【注】

- (1) 大朝雄二「源氏物語の構想についての試論―六条御息所の死霊をめぐる―」『文芸研究 第五十集』一九六五年六月
- (2) 武者小路辰子「若菜巻と六条御息所」『日本文学』一九六四年六月

- (3) 沢田正子氏「源氏物語の母」『源氏物語の探究』風間書房 一九八一年八月、奥村英司「娘の内なる母―秋好中宮造形論―」『むらさき』一九九一年十二月

- (4) 高田祐彦「道綱母から六条御息所へ」『国語と国文学』一九八八年十一月

- (5) 以下「源氏物語」本文の引用は小学館の新編日本古典文学全集を用い、巻数・巻名・頁数を記す。

- (6) 本文引用は『新訂増補国史大系』による。

- (7) 以下「斎宮女御集」本文の引用は『私家集大成第1巻中古1』（明治書院 一九七三年十一月）の「斎宮女御Ⅱ」によるが、読みやすさを図って仮名を適宜に漢字に直した。なお、括弧の中にはその歌番号を記す。

- (8) 注(3)の奥村氏の論考では伊勢下向に際する徽子から母性が見られるという指摘があり、それには首肯される。しかし、当該和歌に徽子の「失った若き日々を取り戻そうとした心」を読み取り、伊勢下向の動機とした解釈は、ここでは採用しない。

- (9) 片桐洋一校注『新古典日本文学大系 後撰和歌集』岩波書店 一九九〇年四月、括弧の中には巻・歌番号を記す。

- (10) 上坂信男氏は、葵巻の源氏には六条御息所の娘を養女にして入内させる狙いがあったと論じる（『養女前斎宮』『講座

源氏物語の世界（第四集）『有斐閣一九七〇年十一月』。一方、藤村潔氏は作者が六条御息所の遺言を物語った時、中宮要員としての玉鬘の役割を斎宮に移し替えたと論じる（「六条御息所の遺言」『講座源氏物語の世界（第四集）』有斐閣一九七〇年十一月）。ここでは構想の問題には立ち入りしない。

（11） 田中隆昭「二人の養女・秋好中宮と玉鬘―光源氏の栄華の

構想―」『人物で読む『源氏物語』 第七卷 六条御息所』勉誠出版 二〇〇五年六月

（12） 注（10）の藤村潔氏の論文

（13） 新編古典文学全集の頭注

（14） 伊藤博氏「『落標』以後―光源氏の変貌―」『日本文学』一九六五年六月